

■ 会議結果報告書 ■

会議名称	「仮称）子ども貧困対策計画」の策定に係る札幌市子ども・子育て会議児童福祉部会（第2回）
日時・会場	平成28年9月5日（月）13：30～15：00 札幌市児童福祉総合センター 2階 大会議室
出席委員	12人出席
次回開催	平成29年1月頃を予定

議題等	概要等
1. 事務局報告	○資料説明 事前送付資料の確認
2. 議題 「仮称）子ども貧困対策計画」策定に係る実態調査について	<p>○事務局説明（資料1：「仮称）子ども貧困対策計画」策定に係る実態調査について、資料2：子ども・若者の生活実態調査項目イメージ（案）、資料3：調査項目一覧（案）、資料4～10：札幌市子ども・若者の生活実態調査（順に、乳幼児（2歳、5歳）保護者用、子ども（小学2年生）保護者用、子ども（小学5年生、中学2年生）保護者用、子ども（高校2年生）保護者用、子ども（小学5年生、中学2年生）用、子ども（高校2年生）用、若者（20歳、24歳）用）</p> <p>○質疑応答・意見交換</p> <ul style="list-style-type: none"> ・機関配布では教育委員会も関わると思うが、調整はどの程度進んでいるのか。 事務局：教育委員会と校長会に相談し了承いただいた。配布先の小中学校は、子ども未来局で候補を挙げて相談する予定。 部会長：地域的なバラつきがないよう、札幌市全体を代表するように学校を選定することを実態調査検討ワーキングからも依頼している。 ・小中学校は通学区域によるので富裕層から貧困層まで分かれるが、高校は偏差値の高低と経済状況が連動する傾向にあり、定時制学校に通う子どもの方が貧困状態にある状況。抽出する学校によって結果が全く異なるが、選定方法は定まっているのか。 事務局：市立、道立、私立を含め偏差値も勘案しながら選定する予定。 部会長：回収率を考えると無作為抽出は難しいので、様々な高校に分散して協力をお願いするしかない。調査から漏れてしまう層は、ヒアリングなど別の方法での対応が必要。 ・保育園も地域や公立、私立によって状況が異なり、公立保育園に経済的に困難な家庭が集まる傾向があると感じる。また、アンケートの依頼文に園長の一筆があるか否かで回収率に大きな影響があると思う。 部会長：保育園等との連携は、札幌市としての姿勢をきちんと示すことでもあると思う。広報等の工夫もお願いしたい。 ・アンケートの回収率70%とは目標値なのか。 部会長：他地域の調査を見るとその程度。大都市の場合は回収率が若干下がる傾向にあるが、謝礼を付ける財政的余裕はないので、そのくらいの協力を得られれば良いと思う。郵送だと30%強が多い。 ・全調査票の最後に「札幌市の制度（行政）についての認知度、利用状況、評価や意見」の自由記載欄を設けているが、これまでの行政調査にはあまり無かったもので、大事な項目だと思う。 ・保護者用の調査票は、本人と家族の基本事項、健康、仕事、子育て、家計、制度やサービスに分けて組み立てており、低年齢層ほど厚くなっている。現時点でも項目数はかなり減らしたが、読み間違いや誤解が無い範囲でもう少し簡略化したい。フォント等のレイアウトも業者と調整してもらいたい。 ・乳幼児用調査票は、遊びについて発達心理学の分野から見て大事だと思われる分類を加えているのが特徴。 ・子ども用調査票は、生活、関係、自己の3つの領域を想定しており、睡眠などの時間の使い方、親、友だち、先生との関係、鬱や将来展望、自己肯定感についての項目も追加。抑鬱の尺度等は若干抵抗があり答えにくい表現もあるが、既存の尺度を使用する方がリスクの緩和が見込まれると判断。 ・若者用調査票は、他地域では教育の内容と就労の実態を中心とするが、札幌市では、暮らしの実態、収支のやりくりを中心に、子ども期の貧困が大人になる過程にどのような影響を与えているのか、過去の生活の連続性も把握できるような調査設計をしている。また、奨学金の実態を詳細に聞いていること、自立や新しい家族形成の展望を加えていることは他地域の調査とは異なる特徴。 ・機関配布するために絞り込んでいる学年は、これが定番なのか。

	<p>委員：小5、中2は従来使われている。子ども本人が理解して答えることや入学、進学タイミングも考えると、小5、中2と設定されることが多い。小2、高2はまだあまり研究対象とされていないが、高2は中学生に準じ、小2はこれまでの北海道の調査に合わせている。</p> <p>委員：中学校、高校の段階だと、受験の時期になって学力や経済的理由が進学に影響して初めて貧困家庭であることを意識するようになる。それによっても回答が全く異なると思う。</p> <p>部会長：指摘のとおりであり、全年齢での調査が最善。ただ、限られた予算の中で分析に耐え得るサンプル数を確保することで調整した。年齢段階を限定することで見えにくくなる部分があるが、その結果を考えるのも今回の調査の狙い。</p> <ul style="list-style-type: none"> 調査の目的は経済的援助ばかりでなく、心の支援も対策に入っているのか。ヒアリング調査も含め様々なクロス集計をしようと思うが、行政サービスの提供を知っているか否かと同時に、頼れない、受けたくないという市民が民間団体の存在を知っているか否かの把握も必要だと思う。なぜ行政サービスを利用しないのかの理由を知って、反省を込めて計画を策定すべき。 設問数が多いという印象を受ける。設問が多くても回収率を上げる調査の工夫はあるか。機関配布も義務的ではなく、協力しようと思えるようにすることが必要では。 <p>部会長：過去の調査等と比べても多いが、全体像を把握するためにはこれくらいは必要。他地域の調査よりは回答しやすい項目にしている。ページ数を減らす方法もあるが、多少ページ数が増えても回答しやすいレイアウトにすることも効果が大いと思う。機関配布も、教育委員会を通して現場の先生にどのように伝えられているかが大きいと思う。</p> <p>委員：寄せられるクレーム等も含めて、そこまで踏み込まなければならない調査だということをも市民に伝えることを、まずは行政にやってもらいたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> 機関配布の調査票の回収方法がよくわからない。 <p>委員：保護者と子どもはそれぞれ別の封筒に封緘し、両方を別の封筒に封緘して子どもが学校に持参することを予定。</p> <p>委員：保護者との関係が良好でない子どもも多いので、中身を見られるなどの不安があるのではないか。</p> <p>部会長：それぞれ自分のものだけに答えて欲しい旨の文章を載せた依頼文も配布する予定。</p> <ul style="list-style-type: none"> 本当に知りたい、支援が必要な子どもや家庭ほど、なかなか調べられないのが現状。 <p>部会長：現在、北海道で進められている調査の責任者もしており、札幌市と基本項目を合わせていきたい。いずれも自治体をあげたこの内容の調査は初めてで、今後の議論はあるだろうが、施策による変化や行政評価を把握していけるようにすることが大きいと思う。</p> <ul style="list-style-type: none"> 成績に関する項目は、学校現場としては違和感がある。実際の成績とは限らないし、実際の成績との比較もできず、子どもの感覚でしかなく、設問の意味がわからない。学習意欲であれば計りやすいと思う。 <p>部会長：学業の達成度について把握したいが、適切な設問等はあるか。一般的にも、家庭的に不安定な子どもほど学業達成度の面でも少し不利を負うと言われている。その点について触れる必要があると思う。</p> <p>委員：相対評価ではなく絶対評価であることを保護者にも言っている。学習意欲や学習面での自己肯定感を計るものがいいと思う。</p> <p>部会長：現実の社会では意欲だけでは評価されないところがあるため、現実に沿う形にしたい。現実の不利や困難は、外から評価される部分大きい。</p> <p>委員：研究で、学習意欲を聞いてしまうと学力が高ければ高いほどもっと勉強したいと思う意欲の高い子どもの方が低い数値を示し、真ん中の層の子どもが高い数値、上と下の子どもが低い数値を極端に示すことがわかっている。現在の成績の項目は最善ではないが、他の項目との関連性からベターな方法として使用したいと思っている。</p> <p>部会長：懸念はあるが、相対的な学力達成度を類推するような資料が必要であり、どの聞き方が最もあり得るかという整理。教育委員会からの意見等も踏まえ、ワーキングで最終調整させてもらいたい。</p>
3. その他	<p>○事務局からの連絡事項</p> <ul style="list-style-type: none"> 次回開催は調査終了後の平成29年1月頃を予定しているが、進捗状況も鑑み、改めてご都合などを確認させていただきたく、協力をお願いしたい。 <p style="text-align: right;">以上</p>